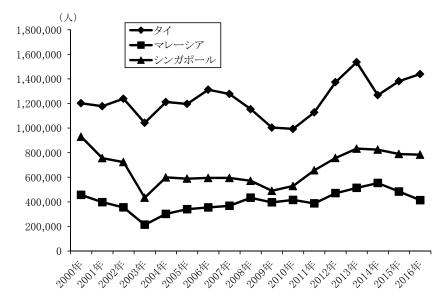
龍眼からみえたタイの環境問題

主席研究員 小谷 みどり

くかつてないほど深刻な大気汚染>

タイはアセアン諸国のなかで、日本人が最もよく訪れる国だ。2016年には延べ約144万人の日本人がタイへ入国したが、同じくマレー半島に位置するシンガポールは半分程度の約78万人、マレーシアにいたっては100万人も少ない約41万人にとどまっている(図表1)。



図表1 日本人入国数の推移

資料: JTB総合研究所『アウトバウンド日本人海外旅行動向』

そのタイの首都バンコクで、今年2月に微小粒子状物質 PM2.5が203 μ g/m3に達し、かつてないほど大気汚染が深刻化している。

日本では、環境基本法第16条第1項で、人の健康の適切な保護を図るために維持されることが望ましい水準を、1年平均値15 μ g/m3以下かつ1日平均値35 μ g/m3以下としており、70 μ g/m3を超えると、「不要不急の外出や屋外での長時間の激しい運動をできるだけ減らすこと」を行動の目安としている。アメリカは日本以上に基準が厳しく、環境保護庁(United States Environmental Protection Agency)は、2012年に PM2.5 環境基準を1年平均値12 μ g/m3以下かつ1日平均値35 μ g/m3以下に強化した。 PM2.5

は肺の奥まで入り、早死、心臓発作、小児喘息などの健康被害を招くおそれがあり、前述したバンコクの $203\,\mu\,\mathrm{g/m}3$ は、アメリカの大気質指数(AQI)では「とても健康に悪い」(very unhealthy) に相当し、すべての人は屋外活動を控えるべきとされている。

今回の大気汚染は、乾期で風が吹かず、大気汚染物質が分散しなかったことが原因だと考えられているが、近年、タイの経済発展の裏でさまざまな環境汚染が問題となっている。

<生活の安定か、環境汚染か>

筆者は今年1月、HIV に感染した人たちの働く場作りを視察するため、チェンマイ郊外に滞在した。筆者のタイへの渡航はこれまで30回以上にのぼっているが、今回、広大な畑に龍眼(タイ語ではラムヤイ)の木がたわわに実をつけているという奇妙な光景にいたるところで遭遇した。日本人にはなじみがないかもしれないが、龍眼は東南アジアではよくみかける果物である。しかし、チェンマイで龍眼が収穫できる時期は6月から8月で、生の龍眼が食べられるのは数ヶ月しかないはずだ。なぜ1月に実をつけているのかが不思議だったが、その謎はすぐに解けた。

HIV に感染した女性たちの縫製工場で、「数年前から、あまり布が入ってこない」という話を聞いた。もともとチェンマイ近郊は、綿花や麻の栽培が盛んで、天然素材での染めから織りまですべて手作業でおこなう伝統的な綿織物が有名だ。カレン族、モン族など山岳民族が暮らす地域でもあり、民族ごとに織り込む文様や色使いに特徴がある。なぜそんな地域で布が縫製工場に入ってこなくなったのかと、工場と契約しているカレン族の女性を訪ねた。

自宅には織機がおいてあるものの、織りかけの布には埃がつき、長い間、作業をしていないことは明らかだった。「ラムヤイが忙しくて・・・」と、機織ができない理由を女性は語ったが、聞けば、龍眼を育てる方がよっぽどお金になるのだという。

別の女性は、「これは、龍眼でもうけたお金で買ったネックレスと指輪」と見せてくれた。子どもたちをチェンマイの大学へ行かせることもでき、龍眼のおかげで経済的にはかなり豊かになったという。よくみれば、村には御殿のような豪邸があちこちに建っていた。龍眼栽培をはじめたカレン族の世帯年収は平均で100万バーツ(約340万円)というが、タイ統計局の調査では、2015年で世帯当たりの平均収入は約月2万7000バーツなので、龍眼栽培でいかに生活が一変したかが想像できよう。

龍眼ビジネスが入ってきたことで、経済効率の悪い伝統文化が廃れようとしているが、カレン族の女性に、いまの心配ごとが何かをたずねると、「ラムヤイ相場。旧正月でいくらにあがるかが不安」という答えが返ってきた。名義貸しをしている農地から収穫した龍眼は、集荷場へ各自で運び、売っていいのだが、集荷場の経営者によって買い取り価格が異なる。道路沿いには、写真1のような看板が並んでいたが、2月の旧正月を迎える1月頃から、相場が最もあがるという。

写真1 龍眼相場の看板



龍眼は滋養作用がとても強く、中国では、疲労回復、眼精疲労、解毒、腎臓や肝臓にも効果があるとされ、乾燥した龍眼が漢方薬として使われている。生の実は、その名前から縁起の良い果物として、特に旧正月前には重宝される。10年ほど前から、中国企業がチェンマイ近郊で森林を次々と買い取り、木を伐採し、龍眼を植えはじめた。タイでは外国人は土地を買えないため、貧しい現地の人たちの名義で土地を買い、龍眼ビジネスを拡大していたのだ。ところが龍眼の旬は夏で、中国でもっとも需要がある旧正月前には、生の実は手に入らない。

そこで中国企業は、中国から持ち込んだ農薬やホルモン剤でタイ人に手取り足取り 技術指導をした結果、龍眼は、年に3度も収穫ができるような木になった。そのため 年中、龍眼の仕事で忙しくなり、たいした稼ぎにならない機織はやりたくないという ことだった。

龍眼の収穫現場にも行った。カレン族の10代後半から20代の若者たちが、収穫係、 仕分け係に分かれて作業をしていた(写真2、3)。1日の稼ぎは1人500バーツ(約 1700円)で、今年4月から引き上げられるバンコク地区の最低賃金1日325バーツを大 きく上回っている。「ラムヤイのきょうだいみんなの稼ぎで、ホンダを買った」と、20 代前半の男性が自慢気にバイクを見せてくれた。

写真2 龍眼の仕分け



写真3 龍眼畑の収穫



ところが、栽培している人や現地の人たちは口をそろえて、「農薬が怖いから、自分たちは食べない」という。ある男性は、農薬散布のときには自宅の窓をすべて閉め、子どもたちには外に出ないよう指示するという。「農薬散布や土壌汚染などによる健康被害が怖くないですか」とたずねると、「それでもラムヤイは儲かるからね」という男性の言葉に、筆者は深く考えさせられた。

ここ数年、肺がんや肺気腫で亡くなる人が増えているという村人もいた。偶然なのか、チェンマイの病院では、放射線治療センターが開所した。病院長は「HIV を克服した今、これからはがんが我々の敵です」と話してくれた。

Thai Pesticide Alert Network (Thai PAN)という団体は、2016年に市場やスーパーで販売されている野菜や果物の抜き取り調査をしているが、サンプル158点のうち56%から基準値を上回る残留農薬が検出されたと発表している。龍眼は調査対象に入っていないが、みかんはすべてから、ドラゴンフルーツやグアバ、ケール、唐辛子もほとんどから残留農薬が検出されたほか、農薬として使用が禁止されている物質も検出されたという。

先進国では、食の安全、土壌や森林などの環境保護、大気汚染防止などが叫ばれているが、経済発展の裏で、多くの先進国が過去にたどってきた同じ道をタイが歩んでいることに胸が痛んだ。

(ライフデザイン研究部 こたに みどり)